那珂郡

筑前續風土記　巻之五

和書門
類 二九〇七
號
函 二三
架 一二
冊 二九

内閣文庫
和書
類
號 二九〇七〇
冊 二九
架 七
函 一七六

内閣文庫
番號 和 29070
冊數 29 (5)
函號 176 51

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

教部省文庫印
圖書局文庫
日本政府圖書
内 一〇一八二號

筑前國續風土記 巻之五

那珂郡 下 目録

千賀浦　弘浦　勝馬　警固

薬院　庄村　那珂川　高宮岩屋 與宗寺

百塚　大鋸谷　大休　野間塘

潮煮塚　東光寺　劔塚　午時講

那珂村　白水村　大塘　伊平田原

警固神社　山王權現社　戻藤　若久

屋形原　春日神社　春日原　小倉

岩戸河内　陀使寺　花攔社　綾野
南面里　尸板越　逦鷲岡　裂田溝
安徳　山田村一堰手　伏見神社
鯰淵　馬瀬　梶原　四箇畑
不入道　埋鐘　鳴瀧　一ノ瀬
五箇山　九千部山　西畠

筑前國續風土記巻之五

内閣文庫

内 一〇一八二號

那珂郡

千賀浦

志賀嶋の浦昔ハ近乃浦といひし也筑前風土記
に記せり此事ハ志賀の嶋の條に詳に記し故
略せり此浦も志賀の浦と号すへし一説に
早良郡今宿村の東北の方の地の西南なる
所ハ今の能古の嶋乃西の塘(タメイケ)也かしこを
渡し左もちかの浦とも云へし八雲御抄ニも
肥前なるちかの浦は近乃浦なり肥前の事

右薩埵峠大名家等にも千賀の浦と號せり

續拾遺
千賀の浦に浪よせかくる色なれや
花なきなくも華かさかりなる　道経朝臣

新拾遺
かひあれやかゝる舟を待わたるらん
松雑女く千賀乃浦なみ　師良

新六帖
千賀乃浦に焼塩竈の煙こそ
あはれ猶(?)見えし(?)かなしかる那　知家

一河部
唐衣近の浦半の荻北(?)度
都のよそにもいとゝ年経(?)舩人　家隆

暁乃千賀の浦風松(?)ぬともなくも
さ(?)ぬ千鳥波に鳴なり　月

都おもひに夢路(?)は志(?)けく夜(?)の鳥
夢は枕に千賀の浦風　寂蓮
史本

弘浦
志賀の枝村なり志賀の浦より一里許南にあり
神功皇后三韓より帰り給ふ時此所にて軍勢
駐(?)集ありしよりかく此名(?)を思はれ(?)むより境(?)絶(?)
唐ことしに弘浦といふ(?)今(?)は(?)此一村乃
婦女かはらき(?)を遠く海人浦ともいふ

勝馬

是又志賀北枝村之嶋の後多望北山を濔山西海
ある也其谷中に道四方に山そびへて甚嶮難なる
所なり有二卯西にありて見へ候
神功皇后御凱旋此時此所にまで至ひしに甚險
難路ありて幡寺あり開なし　勝馬と名付と給
へより此所の西濱にて下馬濱と云所有是又
皇后穡馬よりて下り濱にて至り玉ひしとて此所まで
馬より下りて船にて宮至ひしなとより此所に中津
明神　勝馬明神の社有詳は　三代實録に

陽成天皇元慶四年三月廿二日筑前国正六位上
賀津宮神に従五位下を授けし事有此神此處なり

警固村

警固大明神小烏大明神の事是己に福岡の部に載之

いにしへ警固所此地に在し故其村に名付し
なり　此社を今の薬院の地に移せし　其地は
福岡警固社の所に載せたり　此村の内に別に
今小烏の社あり　福岡の城も本丸より東は警固
村の境内にて　警固村の上にて九山と云山有此山の
出は土に経一尺半の壷二三百程あり此ある
て就は土通して皆壷様をかけすして書記

且世もまちまち内にも土ありいつの時又いかなる人か
埋みしにや又或説に云常陸國志田寛文
三年此秋常陸國平磯村の人古塚あはきて
石棺を得たり棺の内に甲冑太刀なと種々の
器有塚の上に石あり許らなる皆陶器を埋あり
其の上に垣をしつらへ祠の如くしたりと云是又
同し類なり

薬院村

此村むかしは今の此薬院町にありしを福岡の城
築かれし後此薬院町を立られし時今の所

且移郷昔異国より博多に船を着し時薬草
多渡しけるに此所に薬園を構へて植し所
なれば薬院と云よし里人云へり薬院村の上
北山を古賀山と云此村の者昔は此に入し竹
此城し古城の跡多し高き所に有此村
の社有里山より寛永年中此処を浮ふ者世々
其関に来多く入る由云て切り移す事出所に
堆く有是なり先年此に来ると云せしも其人の父
し一説に村老のいふく昔の薬院村と今の
香正寺出来ける所より今有今の薬院町なりとも

然るに今ちの大通筋東して馬市をたてんとて
薬院村の民家を薬院町に移せり移家の跡地
築なむとし時今の薬院に出し之を商家をたてん
為に警固村の西北方に薬院村を移せり今の
薬院村是なり別に此村の立所なくて今に移
されし故農人此処皆棲し小烏の神社も此所
しへ移り薬院村此所も無之也しかし此社も今の薬
院下屋敷町の南北川をこへの有所にて有其
時の神前此池之辺に今埋渋して少あり池今に
有て田地の名残家水田と云移家の跡を築立し

し時山上に有りし警固明神の社を今の警固村
其山上中の清長寺ありし所に移し又薬院村に立寄
ありし時小烏の神體を今の警固村の山上警
固の社に此古殿に遷し移して古民の説に小烏明神
ハ警固明神の伯母にてましませは依て云伝へし故之
とかや其后薬院村に今此山下に移り警固明神
ハ今此薬院に移し在て薬院村の農人
等あかりて他村の間に屋敷並住へて其跡
移し今此薬院村の山上の地に移せり小烏明神
此社殿是之と警固明神の古殿に祭られ小烏の

神とせし此所の鷲宮村の上に於て御殿を造られしく
鷲宮明神と一社に祭りし其後元来法華宗の故
鷲宮明神乃本殿に勧請せし処ハ此後の末社
となる鷲宮明神城在鳥居の額にも鷲宮大明神と
書せり

広村

此村も也しと云ふ北橋に田中川天神此社と云ふ
有て元の境に云ふ長沢を称号の城を築き玉ひ
し時より此を称す称名橋に天神をも
産神とす

那珂川

日本絶ての大河也此川の其源は那須郡
資隈山の麓又此郡又箇山の奥大野より流れ
て那珂郡中を分ち直に常陸の国那珂の東を
通りて道程六十里程を流れ入て那珂川の口となり
水間まで二千石余りて慶長大文四年
川と名を称す原に久村より流出千尾をもって
下ります北広村の境内まで那珂川
とつなげり山流なり
高文岩屋　典宗寺曹洞宗

高丈村の西南十町山半腹にあり窟座の口東に
向ふ内に三の間有廣サ各方一丈高サ口六尺
中に奥に有て一丈高サ凡三丈三尺余奥乃
正面大盤石に佛像細刻あり中は弥陀左
右は観音勢至有り其下阿弥陀あり凡五の尺
に至る故知之國中石窟多しといへ共此窟大家
高サ民家に在て観音と云先云忠之此観音は新里
如来是有数諸の法宝に窟北前に指版一百段
瓦(カワラ)にす之く後之其屋没缺しと之を長者の経法
堂出岩屋を修補し指版を再造し石経経箱
堂并に一寺を建立して補陀山無量寿院
無量寿寺といへしに遠賀郡鮎子村に在て今の
邑龍昌寺に属し近世廃絶せり住僧龍昌
北周道に寺跡を尼僧に此地に来り其廃堂
古瓦山禅師の法嗣にて元禄十年再興
在日万山に請して無量寿寺と改め一東林寺
と同じく報恩大宗寺の末寺なり

百塚

岩屋観音の西北凡二十町余の所有平尾村の境内
光景内に宿有て皆東に向へり其間古墳あり

遠逃有て南より小北方に松東迄より二十町余を
在り古塚と云所ありしが稲荷の塔を
築きまゐらし時此塚を崩して五位の社を建立し
所に崩して宮に宝剣も出たりし所平尾山は背に
在の宮をうつししとぞ又稲荷の社地を築し
時其在りて五月見えける宝屋所建てりと云又
平尾村の中に一本樹とて大成たぶの木あり
昔は左近時志ばし休みし所と云
傳へり

大休

晁火附

大報谷より里西の方赤坂山東之谷馬爪谷乃上高
所に大休とて樵夫の坂を越へ擔物をおろして
群休む所也是より里東南北乃三方を眺望
以眼界を廣くし山々此京其さ流れり前に能
せし荒戸山の風景に於ても天下にも名高し
塩屋明石和哥浦天橋立我鴻述所の佳景
と以て又出見之筈に擬へ又此遠近六
本松と云所有りし所に後漢へし花火
有りし錢と高くあまりて遠方斯人近
時に花火を見物して錢の夜に出る事多し

必しも毎夜見ゆるにもあらず其光赤青くして有
火のごとく稀には色のかはるもあり又見え翻し事數多
夜頃年に二三度は此流の辺にて漂ひ又其中所にて
かの如の火の流れ多し能國にも此類多し筑後
國高良山の石火河内國松原の一火なども此
類なるべし此類の比恵村の火も赤光にて飛ぶ
國にて出る人家の時廣山にて光り明り當時の人
其下に宝ありとて出て開基せし山の事又光氣
あり地より發し空に上りて其光盛山
にありて銅坑有りしといひて數武の張

とも云者岳湯にて出なり江上にて光事有を見て後
漁人其所にて捨てし一乃鐘を網しけり光儒
此云石火寂中火状速は時に則速蔓として
火絶るまて數百年を山中時に火光有と云々
地境圖に云黄金の蓮夜火光有又兵死年
尽れ血能燐となれるといふ明の李東陽か曰
野外の鬼燐其火比青しといふとみ堆
のまゝく未たいつまり我か散し従て鬼火
又ハ読血の燈光ありとし又関古遺草曰火の性
孩田遊光すゝなりて此火は挂火なれば火の

壮麗也し此なるの類によりて見渡に此山本も
銅鉄所在の古りしにや又八幡記に文永
弘安乃時蒙古人来り赤坂（大須合此所に有 平良郎同寺）迄にて
合戦多く人数討死せし事有此時ハ三ヶ所
あまたある塚の中にも此名ありて戦場の事有しも未
知ハかしぬ此村の境内にかゝる塚多く有と云
耳あるは是も又古戦場跡しと云伝れた
兵死の血煙と成りしかも有やしといかゞ
かゝし

野間塘

野間村より西乃方蔵久村え行道に有頗大塘
なり古銭多く数所にも有此塘に蓴（ヌナハ）多かりし

潮煮塚

塩屋の境内にして三宅村の北にあり山の下
此辺え潮来り塩を焼し所也潮煮塚と
名付く塩屋とも云是によりての名也とも云又
此辺にも暗夜には折々火見え有時も見えは
其古廿二三年時よりまで遠ありやき時も美
此如し蓑鴫塩屋紅岩比恵宮聖此村
のあたりにて見えけり人を付ては忽消て又遠く見え南

或二三ヶ所ニ今迄て在事有

東光寺

此所むかし東光寺といふ寺有りし故村の名と
なれる也那珂村の内へ入今迄ても此村の産
神ハ吉備宮なり此社の東道坂東光寺といへり
此所ハ多く三尊路ゆへし亦此村ニ大日寺有りて
為る大日なり是坂中の大日と云也是民疫癘有し
云ふなれハ施療の疫鬼を構へと云是ニ来ひて給
給ひし小児を携へ願ひて年々若き老多く踊をと云
此民俗云伝ふるに此大日を中の大日と云事一本の
木を以て大日の像を三体作りしに其元末にて作りし
中尊ハ宗像郡元木の大日へ本の末にて作りし
粕屋郡須恵村ニ有大日ハ末の中ニて作る也
此村の大日也 此故ニ本中末何れも村の名と云
といふ事ニ東光寺と云那珂郡那珂村故ニ所の
名を以て那珂村ハ大日と云ありし民俗の云伝へ
候ふを以て三方ニ依て有る事故へしかも其の
儀ニ民俗の云誤れる事也へしかも其上
ニ信し難し 此大日堂ハ寛永の頃迄ハ此
堂東ニありて宗庵今堂ニ移せり 此所ハ吉備宮

明神岩の上に大日堂ありしを傳れり地名とな
れりとぞ

劔塚

東光寺北田中ニ有此塚北上横廿間斗長三十
間斗有是所謂城の出丸く此上ハ塀有昔乱世
の時小身の士要害とせし所成べしいへる故堅
劔塚といふなりや評判して石窟迄入る事深サ
二丈三尺許横七尺許入口三尺許高サ七尺有以て
きよし此岩窟へ入口は東ニ向へり是又上古の城跡也

時の民居なるべし

年時講村

近代誤りて五十川と如く昔ハ年時講と書
来りしが数年前みだりに改め定と見へたり其書数多
し此名ハ前々足道は此寺にて年時ニ佛経
読誦せしなりや

那珂村

那珂ハ和名抄ニ当郡の郷乃名とし其名を以村
の名とせしに東光寺村竹下村是へて那珂村
此内へ堀ニ分ち去て三村と分かれり元今ハ名號

以て其郡の名とせし例諸国に多し郡の
名を以其名とせし事も有り

白水村大塘

上白水村に有り塘の中広さ凡百間余北奥
長し也大塘の下に大池ありて此堤の外に大
塘有り其下は田と成たり此田四町有此塘昔ハ
小塘なりしを寛文の比堤を高くし広く
大塘とせり東西へ延して周り凡廿町との
大塘なり古塘の根なり三千六百歩にして水の
深さ六尺有り国中にても此塘と宗像郡鐘崎
此塘鞍手郡植木の塘池猶七町許の塘なと
すくれたる大塘なり又宗像郡にも名池あり
郡に広さ凡池に大池あり

絆牟田原

上臼佐村の境内に長サ十三町の広さ三町余有
下臼佐村と上臼佐二村に近し下白水村
の北にあり

上警固神社

上警固村に有なり薬院に並し海及下警固の
神と同神也と云九月廿九日祭礼有是を祭

梅宮免町より二里二町有上藝國陸長東御堺也三
村より一村の先へ出て南へ向て歩行上藝國
より少し有陸長より中山有東へより南へ有り陸長
此神より背振此神也

山王権現社

此東村に有比叡の山王鎮護せし故に村の名
も比叡と名付く社より村の南杉林の高き岸に
あり六甲皇より三町許の処凡團あり瓜を
こゝろざし置しと云々此村に背分畏火有りて
夜火出此村より出ぬ四方一里餘花出る四時
光きし見ゆ是を見ては下より火出る鬱松の如し
又有り蠟燭の火の如しと見え夏青白く或は赤き二つ三
燃三より燃亜ひ光り宮近く寄て見ゆ是を見は松の
先として消しつゝ火ともゆる也消

戻藤

幸町村の境周寧戻埋まるの道也に有り上有戻
此藤長く延して鎖岸の藤と成り上へ有る大樹より
寛永の末比年根本より實を植継へて今に
有り其側に常此藤宮より極重有り古此藤より極
て大なりしよし松樹にからまり總其への継来の

人呼て弥生山と云ひしよし是れの一つも所
の名とせり今は彦崎と云（

若久村

村より南にあり住吉明神の社有其昔此原より
彦京の地有是古昔　神功皇后異国より
帰り給ひし時此所に住吉の社を立させ玉
ひしと云ひし所へ今にや一説には百年経
其後の当民住吉の社を立ん迚此伝を尋しに
とも云若久村の境内に国君の苑あり
菓木等多し

屋形原

むかし此所は千葉の探題此所に居宅有りしが故
屋形原と云ふ其兄の跡有は堀有て題跡
害地となせり田地の中に栴檀一本有其辺の田地字
を関屋と云ふ是も其昔大友氏の家臣住し所也
所地巡見せられしは早良郡檜原村大平寺に
暫く滞留なりし時関屋と云ふ人の址とかや
今も有りは大悲閣あり此村の東小笹の辺に
大職冠の跡ありて跡ありて此村及若久の
谷と源氏の社有早粮の患あり此所此上

其外相楽村の上條の山より谷川流出出るも
樋井の郷に流れ出て此方の山に東より谷の端も
笠取京北方に谷川出て人の足も又人の地を流
在此方にて流出あり

春日社

春日村にあり村の家居よりして春日の社
古林此中に有て境内広し社前に池あり
林木生茂り祢宜の家あり古木有て大成茂り毎年春
花盛には乱れ見時桜観に来りて遊ふ所也
古へより村邑にて祈りて大社ともいふ又人の古神領
も多かりしと云ふ今も田地少々有て中田白田田地
有りて社領の名残り主に今は十町斗有其余は
田畑を所々の者へ押領して今も其外の不残の畑の
私に領して九月九日此祭りに年中の御饌又膳部
米此籾二斗又神前に備ふ

春日原

春日村の南にあり春日野村の内に入ても所有り
東西十二町南北十二町斗にて平原也京の方
知行の西の方とくに少して広き道ありて見る花の去
みるく性あしき所に五穀の実り難し此ゆへに所々

田園稀なり雑餉の深の山よりし此京を去りて葉
院へ行経済有之中道と云国中北廣郷紙
稀なりとて其一安郷其二條ある郡并東の西の其
稀其三代ある日本へし

小倉村

此村のうち紀岳のほとりに大塚墓三十六有所々に
散在せし先年あばきしに内に古器之類骨有
其何世の時人の葬りしにや不知

岩戸河内

行縄村より上安徳村にいたて凡十二村有仲村氏良
九折未今光道若塚東限西限安徳中東梶原
行縄也　此十二村之仲村の現人大明神を祭
産神とす凡河内と云は一谷の内に数村連なる
故也又何某の河内と云ふもあり

院代寺

別府村の枝村へ大下と云に井尾と云大拝人
田　元明天皇の御宇和銅二年に背振山寺
経也し名猶深参上人院宣有て住職し事有
是より此法帝の那智の為に此所に如くて塚
参話して其墓とみえりけるに寺院史のあり

し寺なれはとて浣紗寺と号す古は為人宴曲抄に見えたり
今は寺もなく本尊は堂に安置す観音堂残れり其
側に湛誉上人の木像あり

花欄社

別所村の枝村岩尾と云所に有名所也此所に
花欄と云山伏有叡術の上手にて且剣法を能
行ふ事多く怪しき事共を行ひ無し所々
是を使ひて人の婦子を取なとして恐れ所を避けよ
可行旦以て当国の花欄を捕へ首級を揚て討せし
彼か叡術の者にて或時とも云然る者あり是を丹波郡
田嶋村の某之を聞是を押ひて花欄を討せ
むとて或日とかくしてまゐり花欄か右の腕を打
落せ花欄怒りて公命なといひかけ師を殺
其の罪花を道へくし後首を斬せ其死骸を晒して
或日の祝儀有りて者なく異類有りて亡ひしか或日
是は怨念なりとて此所に社を建立し花欄大明神
といはひぬ十月廿日祭有り又此松尾村より
おもふ人と云田の字有り　安徳天皇岩戸合
大森種直か亡とあり行幸此時御廷に初し
不たりとも云

後野村

此村に南通寺と云古寺の跡ありて大寺なりしと也
いかなる人の領主なりしか寺屋敷の跡あり文書村民の
家に在周一丈六尺有し大楠有し貞享二年
此地の役人の材木にせんとて切たりしに根を掘しに
下に石有りしを掘りて見れは下にも石有
石の便坂をそこて見れは其下に石櫃有しに其中に
人の骸骨有しに肉残りてあり法ありて其
しても紫色と成けり此事評有けりし
石櫃の内長六尺横一尺二寸有り石の面に文字
有りけれといかなる人を葬りしにや雖然古の
葬に能有る名あるものにてあらん堀出したる法の師
其時に石の小塔六ありしを其従者の墓なるへし

南面里村

山田の川向ひ西の高き所に有村也山田より北に
見上ける所なり田も高地に有此村に向へる方に
名付し南面里の名なりしといふなれとも和泉国
大鳥郡牧尾寺の麓にも南面里と云所あり

戸坂越

南面里村より戸坂と云所を越て東村北と隔

高紀和村ニ有丹波ニ岩戸とて高さ三間半根廣さ
西八間二尺有大岩也民俗此穴ニ而
天照大神岩戸ニ籠リ玉ひし時の扉乃片戸
なりし右此片戸ハ大和國宮戸村片戸明神是也
と云傳ふ此俗説とも多き事なれハ是照して弁
滝ニ及ハ政まる事大岩なる是ハ古より里民
の岩戸と云習ハせ来りニ成へし岩此西より東へ
向へ中を西ニ大日の佛像を刻付て有縁あり
高さ五尺一寸有此岩戸有るよりて此下ニ有
所説岩戸と号ハ里民ハ以重きされ其此村
出雲村の岩戸とて鉢也大岩
小社有里民権現と称し右ニ小さき薬師堂有
後山祇の神也此里の産土也此岩此穴より早
宮郡坂尾村へ越る所有是を岩戸坂と云此岩の
間大石多くして物の形に似たる岩あり
岩ニ坂石と云所有り是ハ宮郡郡野の
なり南西里より此所ニ至るに坂乃間長く
山高し此辺の中南北方坂尾村より小原にも坂ハ
高し是ハ坂尾の北ニ高き事を知るへし

迹驚(トドロキ)園

安徳村は東の方に法所の跡と云此名は上ノ
岩戸の少し東田種直か宅の跡有種直は五代の祖
種貞か時より爰に住せり〔此古跡は誹諧の所に詳なり〕寿永二
年の秋 安徳天皇を木曽義仲か為に都を遷
まひ平家と俱に此所に下りましまし爰に行宮
其行宮の址此所の内に有平家物語に筑
紫の郡を定め内裏は作らるへしと云へり 会議
有しかとも都もいまた定まらねは 主上は
其後岩戸の館へ大蔵種直か宿所にそまし
ましけると有は此所の事也〔岩戸の館と有は種直此時居宅所の遺〕
〔少弐より少弐の名を改め少弐と云ふ故に〕
〔岩戸の少弐と称せり〕又源平盛衰記三十二巻
に平家筑紫にて宮居取の事をいへり
都は大臣殿のを里始めて人々の家どもましましけり
とありて此所此所に多くして此所の内に御所の内
あり又畠も少有一町許有西北に堀有り少
高し 安徳天皇居址と語り伝へと云 遊世
永禄元亀の比まて此法所の内に周りに築地有
又天正度の兵乱にも名遺りて築地多く残りしと也
然るに秋月氏当国の始とかくて是を崩せり
去れは今も少築地の名も失ひ所ことに残りて

是西此谷ハ上村より高き事八九尺許以上の岸なる事
恰奈良の如く広さ東西百八十間
南北百五十間許あり 当九町許有四方ニ山ニ隣りて二十歩周りニ田園ニ山中ニ向ひ西北高く
広平の地也其下に心あらす人ハ此谷の西ニ当り坂の中を越て三段余許の平地有り此谷をおとし漏出して是下ハ流れ出て東田民の祈雨
所謂此谷の東の裂れ溝有 神功皇后の御時
東より流ひし時雨れとりかき所にて溝を掘り給ひし所
の谷なれハそれより此谷を名付て呼し日本紀
神后の紀に見えたり今も里民は流所の泉を
云てそれを此谷と云事を知る又一ツ東南の
岸下に小さき谷有裂田の溝に通し是を小谷と云

裂田溝（サクタノウナテ）

安徳村の迹ハ方許神の城下流水の東乃ち東より
岸下に有り日本紀 神功皇后の紀に曰
皇后神教の験有事を知給ひ更に
神祇を祭りて躬ら西を征むとおもほし
爰に神田を定て佃りたまふ時に儺河
の水を引て神田に潤さんとおもほして溝を掘ら
せ給ふ迹驚岡に及て大磐塞りて溝を穿る事不能
時に 皇后武内宿禰を召して剣鏡を捧けて
神祇に祈して溝を通さん事を求む則時に

雷電霹靂して其磐石を蹴裂て水を
通せしむ故に時の人其溝を号て裂田溝と
云なり日本紀に見えたり是ハ紀記の説の通りの
大岩の上流水の通る所是日本紀に志る也
雷のさきわりたる所也其溝の東方に岩有
一方は田乃中に鳴乃声しくて其形象の
如し故に象鳴と云其流の中に岩有所を
振切りし所ハ可成有其堀ノ跡大溝山より
水面より高き所也又其辺ハ水の深さハ六尺余
或は二丈許有り溝の廣さ廿尺より或ハ半丈弐尺
有此溝を切通したる所廣く深くして長
く人力の難及所にして凡神功皇后
の時堀らせ玉へる故溝なるへし此溝の水ハ上より山
田村の一の堰より来りて甚象鳴の側に地蔵
有是神功皇后此社を地蔵と附会し
て祭来れる事不審

安徳村

清流原の　安徳天皇の行宮の有し所なれハ此
に有村なれハ名付けしと安徳村の
枝村風早と云流れに堰あり井手の廣さ

三十七間有其上の劍號爪早劍と云爪早大
明神有爪早北古神也 此爪早并劍北ハ下瀬山ニ有り共ニ在し法ニ在し候也
山田の北方ニ帶りて田地を減する事有

山田村

無量寺の西半里ニ在無量寺より南北山の間
茅ヶ一河周有平田里是山田村の境周ニ入山中ニ於
迄ニも廣く然して平らかなる也又揖の西
北方ハ高田ニ入凡此村中古代肥壌なりし
多く菜蔬を作れり又此村の上ニ居周細く汗及
の西城田此中ニ強うなる塚有其背ハいつも時雨や
合戦有りし時鑿埋し所と云へり

一堰 并

山田村ニ有是 神功皇后の振りせ玉ひし裂
田溝の水也此溝を引きて城田地ニ灌く
神田を作りせ玉ひし者也 神功皇后の勅ニ
廿餘歩へ成堰ニ并築きし一并ニ北ニ廣さ八十歩
有大并ニして此郡ニは限らず此國ニても稀なる是
郡ニの大堰ニ又別ニ是へ及此水山田安德東
溜池村五ヶ九松本寺光凡七村共田地百二十
乃町余皆此井を以て灌せり

伏見大明神

此社姫乃松原の川上大明神とならひて塩子山城
国伏見の御香宮を勧請し合祭なりし
伏見大明神と云来る祇園社ニ神宮神躰之
本像にて有し異人乃田青博多焼し時
此所に祇園の神躰を持来庄屋に持参して祇
園ニ之神躰なし依幣を以神躰とし改め博多ニ
伏見御香宮也　神功皇后也　伏見ニ社あり
而世は此社を伏見大明神と称しあるや
昔　皇后此處にて神田を築き給ひ農人に
賜ひ裂田にて海水を無し農民共あかめ玉ひ
しかは旅人共に感しけり　皇后も此所
見参りありかりしん

錬劒

山田村にあり一乃井手の上也此劒ハ錬冶多
し岩ハ見る所ハ高さ一丈し岩穴の中に有りと云
國中天下ニ変事有る時ハ鳴動して鐘る
と云天正十四年薩摩之兵筑前を乱妨せし
時此劒中より錬遂出る所く出ぬ元和
元年大坂陣の時も又錬剣出る事と承けり

出し白鏁及鐵並鏁となし鐵並へて能此如し
く皆此白き鏁も此より出ると云鏁の
大阪吏又三十人又四尺又及入り寛永十七年肥前
有馬の鐵兵起りし時も出たり御先勤当家
此とりし戰しくも出たりしと云亦當其妻
長崎公此事を作りまひしより當時某山田村根
大坂の此所よりて宛行まて事出来有りしと
地頭遊所せて数箇此前我とも鏁出来たると云
此所此鉛一の堀をより上流を神の使とし
里民恐て此堀をまた下より後まては神此恐れ
深きりとそ岩の魚此出さし食ふ事こそ之

馬瀬

山田村の西城川に馬乃瀬と云所有鏁劍の
上なり里民傳へて曰新羅賊天百済より来り
ましける時新馬にて宗此瀬を越まて故に馬の瀬
とは云ふ此説信し難し人の諺に云る瀬代弟当
再足らぬ事といふなりよし　神功皇后
三韓より帰りたまひ皆播磨に上陸たまひし
時此瀬を馬にて渡りたまひしよりの名なり
云傳へしなりや天照の弟伐天女神に

皇后も天女神にて新羅より帰陣せさせ給ふとき
いこひ給せられしと

梶原村

上下両村山谷数上下の間遠し四方ハ山あり
谷の中ニ有里三へ境周長さ三里許有民俗
云伝ふ所ハ梶原景時か末葉此所ニ住居
故ニ村の名とす又大成寺の址有り是正平十三
年建立と云是景時か末裔の居寺なりし處也
云正平二十と云二十年の古堂長の坊居なりしと云

四筒畑

岩戸河内の奥山中也是亦一河内ニ有
不入及堤鐘明殿一の瀬此四村ハ入ある
の村にて南畑と云ありし村あり名字を帰る
以て名付たりて四ヶ畑と云此奥山へ越へて
五ヶ山ありし四ヶ畑五ヶ山ハ皆世多きへ

不入道

むかし昔猪山登りし時ニ出て猪不入の地として
有りしと云此所より上ハ出入を禁じ不入の事下
故に名付しとなん或ハ恵日の小寺ある
常ありとや総てハ道ハ字ハ壹ツ字にて書す也

亦此村の境目に滝有り水流五六尺はかり其下
ふかくしき好銚之一ツ倒に小さき銚子壹ツ有
山田と云不入道下の方東北山の方に有大岩
石立てあり

埋鐘

此村の中にかねうらと云所有昔此所にて鐘を
鋳ける時に異相有り故に其鐘を埋める所なり是に
よりて所の名を埋鐘と云又昔乱世の時
陣鐘の様なるもの有けるを土人是を埋め故に鐘を埋め
し所なりとぞ申也

鳴滝

此村に瀧有り故に鳴滝と云境に流れて成行
と書り村より高山有りかゝる山と云枝村に
寺舎と云所有昔此青貝の様山寺絵の花
有りと云今に畠となりて又此村の当
西里村の山に名有南花多し是を花の筋と
錦にさくを見るなり

一瀬村

那珂川の上流にて是より又箇山へ入る出す所
川瀬五有て一瀬と云也村名も是に記す所に有

塩なる山前なる川向ひなる山有て佳境なり
幽れる谷水は吉岩に出て面白き所なり又此末に
は一乃嶽と云古城有（古城の跡は詳也）

一姫水と云は男黒田吉兵衛此村に下居せし頃の宅
址也ト残り跡境此池に有る河西の高き所
也墓有り

一此村より又ケ山は同御井村にかり東の方に瀧尾
峠（トウゲ）を越はり又山を越ずして川にさかのほり
行なる所に動石と云有是の岩は高さ十二間
も有へし其石へ是より四五町斗り川上に瀧有
高さ四丈余有り水の流れ出て流れ落て池の如き
深き事言ふ様なれ共一丈許に大石多く見所有る
此外に小流此流有水多き時は一流ごとに滝
是より三町程行は東不動に至る所なり
一所に在りしへり東は岩の高さ十丈六尺余の
岩の高サ九尺余有東は岩に梵字を彫刻なり
其岩は根ひ割たる如く天工にて
奇絶也本堂より二町斗行は泉有と云所有
甚だ静かなり横二尺余長五間長さ尺余
流れ行て塩なる村に至る帰路の渡中山手の

奇石怪岩の奇絶猪迄より称ますも危跡にして
て難道なる往世すなわち紙姫と及処ども王歎く
猶有山川好ぬ遊観惜不許二世今併看二
を絶りしを実さ承事挙るし

五箇山

岩戸の川上深山北内村迄続にて五ヶ山と云總
名道枝折業の河内大野小河内是也一の麻
より亀尾山嶽と云山を越れば郡内五ヶ山の谷
なり此川の筋まてく岩戸一河内とし一山田紙
一河内とし四ヶ郷を一河内とし五ヶ山を一河内

是も同流の上下にて四の河内有名枝折より里
東に有川向ひへ東の山を越えて承業之今郷て
北中里と云猪なり川北西路の剣に有此後に
梅ミへし猪なり村の境内に虎ヶ岳とゝく古俄の
流有帰志き及亀尾山に流れて北東南
北方に出て東盤河内は猪なり川上ニ有り
川東へ瓦尾十二三郷有此迄より里上へ名皆せしも
く猪なり上中八九町許に菅二反迄に在り
山流に添ひて東に七八町行は大野と云村有
其に東に坂ずして左に勝して大流に添て

乾の方ニ六七町行ハ小河内ニ至ル大壁と小
河内と谷替り大野ニ至ル民家七八軒有桜有
又ヶ山の内也 川北向ひ内谷北内ニ肥前神埼
郡西小河内の枝村有大野より十七町余南
ニ出ル有是肥前筑前の境也 国新田ニ是
残り水是肥前へ行道也 東小河内ニ跨ル谷
廿丈町有東小河内村より下テ見ルニ少く
流き渕有渕北より二丁余ニ滝落し武
急の山寺此地に塘を經て谷より落
きんとて此渕の上に大成椎木に見ル此所也滝
水くかくけ付きより左落しこく彼見水ル
瀬ありて死せり故に見ル落と云東小河内此川
向ひニ有村を西小河内と云是ハ肥前の内也民
家有東西一村成べきに村を異にせしものなる
故を異にせり是間綾に一乃小川を隔川
大野より肥前の内なるぞくして筑前なり
西小河内より筑前の内なる人くして肥前なり
元国郡を分川より高山大河を以て境とし
土地ニ境を隔て数故に其地の風景も同し
故に彼人民の風俗も皆よく事たるも有之 又

山の嶺続りつゝき分れ出して小脇川渠に続
漏て武小田原を断て流れ上段出而も所々
同し谷此中に有りといへ共国紙是よき変
諸国に多し東小河内と西小河内を備中
是かの為に川を一流にて男女皆多様に集まれて
風気も異なるすして民俗も同しからん事
国の風化により至りても云語民俗も皆至りと
云東小河内に山神の社有り松有大木にして除
かし山に桜多し花の頃より見る事に絶
えさり山深き所に世なるの所によくして道は尤是花

事十四文目平かりし處ゝ温かにして一生迷有れ共
大かたは難多嶮有也前二三日此地の山さんとして壁之
向ひの西小河内の山さも桜多し深樹志も多く
此谷中は安をも其所をは深林にて落葉積る
此時者深遠にて西向きに境地なりし又ケ山と山
中境内様く田圃となく出来人民多し
薬を採りて出産して及ケ山崇とて先を恵
此山川に二三月には桜の花とかく奥有て取銘
丹似て小なり

九千部山

道枝村北内桜谷の上ニあり山之村人の後ニて背
僧玄く法華経一万部読誦せんと志し
此処ニて九千部よみ終りし小此山上ニて塔を
立たりとて故ニ九千部山と称ス今此上ニて雲路
其二重の石塔有高サ二尺許有り又下ニ風宮
とて宮有後千部も筑後久留米の僧の派
と云所ニて読誦経地ニ経を埋むと云
一説ニ其経を埋みし僧ハ性空上人なりと云
九千部山の北の麓ニて谷川有一の瀬の上ニ蛇尾
山麓の東へ流レ出所五ヶ山の方へ行ましく是の
方ニ行谷川を渡りて上ルれば九千部山のふ
もとニ至ル其所ニて氏家あり出来より
寺社なりとも多く九千部山高く峻して桜木
多し此所ニて背網をはりて鷹を捕る事多しへ
是より肥前ニ越る所坊主郎山所とも云所ニ境堺有
里程あり北方へ越れバ肥前国基肄郡と云所ニ
出る所あり基肄郡と筑前ニて其木河内背是又
筑前北内なり

西畑村

此村も早良郡小笠木と基肄郡芥所村との間

山中ニ有地蔵村寒を過てはなれて所村よりして
至りて路山寒あまり小笠原村よりも難所其
谷水ニ東より流出て茶沢村より所々沢村より沢
之十餘町ニ至て間ニ山あひ谷之清流激湍多
高しくく西白き緑泉之能中鯨同じくして高二百
尋余滝有鋭美ニ岸よりて落てかくして下ニ至ニ小なる渕
あり村中より古ある此跡三所有此丘尾谷ニて
尾ある跡も有ある一寺もなし庵室ニて山振
也十一月初旬より参詣有此神ニ葦毛の馬を備ひ
至るとなく村中ニ是様何を此神のこたふるを
葦毛の馬を備ひ至るとなし其人住人来て神霊ニ有
座郡馬見塚観もありといふ又紀國よりあり
摂津國有馬の湯及山陰濃尾月の寒等同し

筑前國續風土記

席田郡

此郡は御笠郡那珂郡糟屋郡との間にあり攝り國中にて最小なる郡也唯八村有八村皆東ハ山乃麓に有て南北に長し延喜式二十二巻曰凡郡不得過二千戸若餘戸五十戸以上者分隷此郡地勢不宜分者隨状立別郡其不滿百戸者隷入他郡若不得已而應分者別録申官篤信思ふに席田郡も

小ゆして那珂郡須磨笠に住く高く地坊さえ人
里は今の屋き似てありて地去里と右三郡
何里も大也若み上に更田郡と來水の戸数
那今千戸ぬ里なる文字名里て戸数少く名ほ里
とも前に此郡をしるなをりく天藏に此歌ハ
甚小なる人し古今著聞に曰
経しるく下国の時八月十五日夜に筑紫国更田
驛に着きけりるに天晴月明なりけ鏡に
おもよおもしろきぬ樹有る様葉廣さし霧く
月鉄海岸里は人を白ゆへあてたるまゝに其来
地切なくひ世く月にむかひて歎きするゝ跳也
かく歌ひしてにぞすゝ見し天明ぬれはたゝ里
にりかく歎ずき人も今まなき世なるり絶
更田北驛いかし人此郡北因いりなるにかりけりや
今また湖岸里なき若今月明ふ所猿経の
名月鉄見なる里し而なるも大原楓木有し生若
鳴子跳し竹里は楓猿とかなりしく坂に
跳さく月澤と書くにや月猿は此郡北ましま山
下に有此所むかしの道なて宿駅也しかや
和名抄に載る須の名の名三有

石田大国　許斐郷今は二ヶ名一つに侍
るし
今称する所の村共名
下臼井村　上臼井村　青木村　平尾村
上月隈村　下月隈村　立花寺村　金隈村
金隈村
御笠郡と席田郡との境にあり笠の中村と
金隈との間にある村也東南に尾続きて高き
山の尾有り是を上りて宝満嶽といふ東北の谷の奥
にも宝満嶽といふ南の山上にも有是皆上古の

宝塚にして地形みしかし石を掘て多く出し石
宝塚あり此所又金の隈此所も山上にも石積有
かくれしを穿て見出せは銭人物の作を埋れ向ひて
見出せはうつしまたは西南より出し是
遠き石の高さ三尺余横一尺許有此石積に
刻む人あり元禄十七年二月頃文字を刻て
代々に刻みし是銭見出せり其の里一ヶ月
此石見出す人々多く見しつく　引をきて是を出す
石の数やありてあり　極石多く出し其中の
石積上座郡　美奈宜村にも有此石此事美奈宜

村の所々も詳ならす説も山城國鷹ケ峯の
中にも有

圖書文庫

国立公文書館
National Archives of Japan